

農業が おもしろくなる 私の 情報活用 4

「ルーラル」が支える 合併農協の営農指導を

和歌山県・JA紀南 瀧川裕司さんら

編集部



瀧川裕司さん（JA紀南・指導部営農企画課長）

これまで三回、農家の「ルーラル電子図書館」会員にご登場いただいたが、今回は、JAでの「ルーラル」活用を追ってみた。

全国に先駆けて ホームページを開設

和歌山県田辺市から串本町まで広がる本州最南端の農協、JA紀南。「紀州梅」の産地として有名だが、全国でいち早くホームページを立ち上げ、IT活用の先進JAとしても知られている。

ITを推進してきたのは、JA青年部のパソコン班だ。平成二年に農業青年五五名を集めてパソコン教室を開催、使い

方の学習や簿記などでの利用を進める一方、パソコン通信で全国の仲間と連携しながら研究を続け、平成八年にJAのホームページを開設した。

「パソコンで、いつも忙しく、場所も離れている農家のコミュニケーションを図りたいと思った」と、パソコン班のリーダーの一人、泉雅晴さんはいふ。

パソコン班の事務局を担当したJAの瀧川裕司さんも、インターネットに出会い、「これからの時代はこれだ」とすぐに新しいパソコンを購入し、青年たちと苦勞を共にしてきた。

青年たちの熱意に応え、JAもインターネット整備と、より充実した情報提供を目的に五〇〇万円の「情報化整備積立金」を用意、この基金を元に設置したサーバーの機種選定から設定までを青年部が担当した。

平成十二年、パソコン班では、リアルタイム気象情報や農業技術情報、メールなどを活用した情報交換や農作業アドバイス、選果情報の配信など、JAのIT利用計画を提案。



泉雅晴さん。JA紀南の情報利用を推進する一方、地域では「秋津野塾」のマルチメディア班で活躍。地域の諸団体が構成する「秋津野塾」は混住化のなかで、新住民と村民との交流や防霜ファンの普及によるトラブルを防ぐという

このうち、リアルタイム気象情報とともに、昨年からミカンの選果情報が稼働した。光センサーで農家が出荷したミカンの等級や糖度を計測し、そのデータをその日のうちに農家にメールで配信するシステムで、ここまでやっているところ

は他にないという。自分のミカンの品質や糖度が、全体と比較して示され、自分の位置がわかる。収穫時期や園による糖度のちがいがわかり、収穫の早い遅いの判断や園ごとの技術改善に役立つという。

そして今年から、「JA夢NET紀南」（じゃむねつと紀南）がスタート。「営農情報」や市況、生活情報を提供するとともに、組合員からの意見・要望などを受け付けることにより、組合員の積極的な参加・参画によるJA運動の活性化を目的」とした登録制のメール配信システムである。携帯電話でも情報を得られ、家にいないことが多い農家にとって、便利なシステムだ。

「ルーラル」の検索機能を活かす

こうしてIT活用を進めるJA紀南は、平成十年、指導部の瀧川さんを窓口にして、「ルーラル」の法人会員になった。「JA紀南の支所はすべてインターネットにつながる環境にあります。ルーラル

会員になれば、支所でも調べることができ、仕事の効率が向上すると考えたからです」と、瀧川さん。

指導部では、「果樹編」「花卉編」「土壌施肥編」「病害虫診断防除編」などの「農業技術大系・農業総覧」をそろえており、事務所では本でみることが多いが、出先では「ルーラル」で調べる。

そして、「電子のメリットは検索の便利さにある」と瀧川さんはいふ。

「特に面白いのは全文検索です。目的外の記事も検索され、本来の目的以外の知識が広がるがあります」

こんなこともあった。

ミカンのチツソと生育の関係を調べたくて「葉内窒素」という言葉で全文を対象に検索したところ、目的としていた「果樹編」の記事以外に、「土壌施肥編」の農家事例の記事があった。

その農家は意外にも近隣の上富田町の谷本幸太郎さんの記事で、そこには、「早出しミカンを栽培するために、葉内窒素一・七〇％に維持することが大切で、秋肥を多く施したときは、三

分の一ないし四分の一が次年度の春肥としてもちこされるところを考えている。したがって翌年の春肥をゼロとし、葉色をみて四月に窒素4kgでいどの追肥を行なうようにしている」とある。

施肥に対する農家ならではの判断に学ぶことは多い。さっそく谷本さんに連絡して具体的な話をきき、たいへん参考になった、という。

ごく最近では、ミカンの生理落果の記事を調べた。今年は生理落果が多く、そこで、ルールで検索。「果樹編」の記事には、生理落果は、開花後の高温で助長され、これに日照不足があらわされると激しくなると書かれている。さっそく気象データをグラフにしたところ、平年に比べ、満開後一〇日間の温度が三度ぐらいいく、その後五日間は雨で日照不足が続いていた。

気象の影響の恐さをまざまざと見せつけられたわけだが、これを営農指導員の会議で報告するとともに、光を反射するタイプバックを四月から被覆して光合成を高めるにはどうかなど、対策に思いをめぐ



らしている。

ウメやミカンなどの主力品目について、JAが指導する栽培技術や新技術の導入は、試験場や普及所などの指導や協議を受けて決めるが、その場合でも、自分なりに調べて裏つける努力が大事だと、灌川さんはいう。それが指導の力量を高め、現場での発見にもつながり、農家のための営農指導を築く力になる。その際、頼りになるのが、各品目の生理・生態、基本技術が詳しく記載されている「果樹編」など「農業技術大系」の記事

指導部にそろえてある「果樹編」「花卉編」「土壌施肥編」「病害虫診断防除編」

だ。そして、勉強するならば本がいい。

「電子で検索して、読むのは本。いくら時代が進歩しても、自分自身の『性』はそこまで対応できません。たとえ同じ内容であっても、『本で読む』という行為と、『ディスプレイで見ると読む』という行為では、記憶として残る量はどちらが多いかということですよ」

こつ話す灌川さんは、個人でも「果樹編」を購入している。

多品目の要望に心える

JA紀南・大辺路^{おおへじ}営農室の指導員、田中壽一さんも「ルール」をよく利用している一人。本所がある田辺市はウメとミカンが中心だが、田中さんのいる大辺路地域は、規模は小さいがなんでもある中山間地。最近では、直売所むけに多品目の野菜を栽培する農家が増え、高齢化・過疎化が進むなか、特産品をつくるという取り組みもある。田中さんは、

二〇年のベテラン指導員で、本所にいたときは花担当だったが、「今は、なんでもやらなければならぬ」。

農家四、五名でジネンジヨをつくり特産にしたいという話がもち上がり、その時は「ルール」で「野菜編」のジネンジヨの記事を勉強し、その要点をまとめて農家に提供した。

水田転作でナスをつくりたいという相談があったときは、ナスの開花生理、着果習性、仕立て方、枝の更新の仕方の記事をプリントして勉強し、仕立て方のイラストをみせたりして、農家に喜ばれた。「普及所の統廃合などで農家の相談先が減り、ますます営農指導員が頼りにされています。JAの売り上げにはあまり貢献していないけれど、組合員には貢献しています」と、田中さんは張り切っています。

営農指導に求められる専門性と幅広さ

合併が進むなか、JAの営農指導の強化が叫ばれているが、人員不足など現場

の悩みは大きい。ここJA紀南も二年前に広域合併し、現在の正組合員は約一万四〇〇〇人、本部も含めた営農指導員は二九人。三八カ所の支所すべてに指導員を配置するのは無理で、一人の指導員が何カ所かを受け持つ形になっている。先の田中さんの場合、「半径一時間以内」が担当地域だ。

支所での営農指導も充実させたいが、一方では、「専門性を高める」ことが求められている。だが、人員増は難しい。悩みどころだ、と瀧川さんはいう。「専門性」を高めることは、専門的な農家のJA離れを食い止めるためにも重要だが、それには、「営農センター」をつくって人員を集中し、研修なども強化しなければならぬ。そうすると、支所の指導員を削減せざるを得ず、田中さんのように地域の農家の相談に応えることができなくなり、JAと組合員の関係が薄れてしまう。

専門的な農家もいれば、多品目をつくる小さい農家もいる。いろんな要望にできるだけ応えたい。そこで、「ルール」

を本とともに役だてる。

農家の相談を受けて、「病害虫の診断と防除」の情報もよく利用するが、それ以上に「農業技術大系」を頼りにしている。各作物の生理・生態と栽培の基本、そして豊かな観察眼に裏打ちされた精農家の技術が収録され、イネから野菜、花、畜産、土壌施肥までを網羅した「大系」は、専門性と幅広さが求められる営農指導の大きな支えだ。

ITの先進農協・JA紀南は「ルール電子図書館」を活用しながら、広域合併に対応する新しい営農指導の確立をめざしている。

「無料体験」希望者募集中

「ルール電子図書館」では、登録農業検定で好評の「防除コーナー」に加え、「農業技術コーナー」「食・加工コーナー」を開設、ホットな話題や新着記事情報を提供します。「無料体験」希望者募集中。詳しくは口絵後の広告ページをのぞいてください。